史学研究会名誉会員京都大学名誉教授羽田亨博士訃

本会名誉会員、京都大学名誉教授、日本学士院会員羽田亨博士は、昭和三十年四月十三日、宿痾癒えずして、七十四歳で永眠された。我々は博士が生前本会の為に尽された功績と恩顧とを今更ながら追憶しつつ、感謝と哀悼の念の転た切なるを覚ゆる。

博士は明治十五年、京都府下に生れ、京都府立一中、三高を経て、其後三年間を東大史学科に学ばれたが、卒業後再び京都に帰り、京都大学大学院に入学された。以後明治四十二年京大講師を委嘱され、助教授より教授に進み、前後四十年に近い歳月を京都大学と共に過ごされた。特に昭和七年矢野仁一教授が退官されて後、東洋史学科の主任教授として教室を主宰し、浜田、西田、時野谷諸博士と共に陳列館の中心となつて後進の育成に当られた。其間幾多の輝しい学問的業績を挙げ、我国東洋史学の発展に巨大な足跡を残された。

博士は早く明治四十五年、内藤博士等と共に奉天の清宮を訪い、清朝開国期の根本資料たる「満文老檔」や、満漢蒙回蔵五族の言語を並列せる「五体清文鑑」などを撮影して将来され、昭和三年には「蒙文丹珠爾四十八函」を、同十一年には「成吉思皇帝聖旨牌」を教室に購入される等、貴重なる資料の蒐集に尽力されたが、また明治四十四年には京大文科大学叢書の一編たる「大唐西域記」の校勘並びに索引の作成、昭和三年には「四訳館則」の校訂刊行など、史料の整理校訂にも留意された。これは博士が東洋史研究室を中心としての成果の一端を示したに過ぎず、東方文化研究所、満蒙調査会、日満文化協会などにおいて博士が指導育成された事業に至つては枚挙に遑がない。本会に対しても、博士は明治四十一年成立当初より中心会員の一人として活躍され、大正五年本誌「史林」の発刊以後

永く評議員たり、時には編輯を担当し、また屢々貴重なる玉稿を寄せて紙面を飾られた。このため本会は昭和二十九年秋、名誉会員制を設けるや、第一に博士を推して、その功績を感謝せんとしたのであつた。

博士の著書は必ずしも多くないが、一たび現われたものは、不朽の価値と最高の権威とを有した。特に「西域文明史概論」と「西域文化史」は他の追随を許さぬ名著であり、国内のみならず遠く海外にその名声を恣にしている。西域史の研究は博士が心血を濺がれたる分野であり、先に那珂、白鳥両博士が開拓されたる道を、整然たる体系に組立てられたのであつた。西域とは言うまでもなく、パミール高原を中心としたる現今の東西トルキスタンの地であり、古くから東西文化交流の要衝に当り、この交通によつてこそ東亜は西方世界より孤立せずにすんだのである。ヨーロッパ学界がこの地に著目したのは甚だ古く、殊に十九世紀末より探険隊を送つて考古学的調査を行い、且つその専門的学者を養成しつつあつた。イギリスのスタイン、フランスのペリオ探険隊は最も有名である。之に刺戟せられて日本からも大谷ミッションとして橘瑞超師がこの地を踏破されたが、その規模において遜色なきを得ない。然るにその研究の点において、日本西域学を樹立し、立遅れを取戻して西方の水準に達したる上、更に之を凌駕せんとする勢を示したのは、博士の功績であり、その透徹せる識見と、豊富なる語学的才能を以てして始めて可能であつたのである。博士の学問の分野が広く西域に亘りたるため、その西方学者との交友も従つて深く、大正三年ロシアに赴いて老碩学ラドロフ教授についてウイグル文献についての疑いを正し、其後フランスに留学するやペリオ教授と親交を訂し、大正十五年にはペリオ教授との共著として「敦煌遺書」第一集を公にされている。

博士は始め元朝史研究に志され、遼金元三朝及び清朝の北方民族史に対する興味を最後まで失われなかつた。而してその研究方法は西域史に対すると同様、言語を通しての基礎的研究であつた。かくして元朝の漢人支配について犀利なる研究が生れ、また本邦にて未曾有の「満和辞典」の編纂が行われたのであつた。

斯くの如く博士は我国東洋史学の発展に偉大なる功績を残されたが、昭和十三年より敗戦の年まで七年間、我国史上未曾有の最大なる受難期を京大総長として在任された。この間苛烈なる時局の重圧に対して、学問の道を守らんが為に費された苦心は想像に余りある。戦時中に拘らず、友人受業生が相集つて「羽田博士頌寿記念東洋史論叢」一大冊を編纂して先生に捧げんとしたのは、一には先生の労苦を慰めんがためであつた。

戦後社会が落つくと、先生の学問的業績は漸くにして内外の認識する所となり、昭和二十七年フランス学士院は、博士の東洋学に対

する功績を称えてジュリアン賞を贈つた。越えて昭和二十八年、日本政府も文化功労者として文化勲章を授与し、昭和三十年一月にはフランス政府より日仏文化交流の貢献者としてレジョン・ド・ノール勲章に叙せられたことは、なお我々の耳に新なることである。

博士が逝去されると政府はその生前の功績により位を従二位に進め、天皇陛下より特に木盃一組、金一封を下賜された。翌十四日自宅で密葬が営まれ、法名を文清院殿滴翠元亨大居士と諡られた。同月十七日午后一時堀川寺ノ内上ル興聖寺において、山崎相国寺管長を導師として朝来の雨しめやかな中に本葬が執り行われた。式場の両側を埋める供花は、生前の博士の功績を物語るようであつた。読経の進む間、文部大臣代理岡野学術課長・フランス大使代理ルボック領事・日本学士院長代理新村博士・滝川京大総長・高山京都市長・高田京大文学部長・貝塚京大人文科学研究所長・門下生総代鴛淵一氏等の弔辞朗読、焼香が行われた。終つて喪主羽田明京大教授及び葬儀委員梅原京大教授の挨拶があり、荘厳な葬儀の幕を閉じた。本会は博士が会の発展のために尽瘁された功績を偲び、供花と次掲の弔詞を捧げて哀悼の意を表した。ついで五月十三日午後二時より岡崎公会堂に於いて京都市主催の名誉市民に対する市公葬の礼による追悼式が執行された。（狩野直禎・上横手雅敬記）

史学研究会を代表しまして、本会名誉会員京都大学名誉教授羽田亨博士の霊前に謹んで哀悼の詞を申上げます。

博士が京都大学文学部史学科ならびに史学研究会のために尽くされた御功績を想いますのに、実にその草創の時に溯るのであります。博士は明治四十二年に講師の委嘱を受けられましてから、昭和十三年十一月京都帝国大学総長に任ぜられて教授の職を退かれるまで、二十九年の長きに亘つて教壇に立たれたのであります。

その間史学研究会につきましては、明治四十年結成当初創立の議に参与され、当初は委員として、間もなく評議員として、会務の処理、会誌の編輯に一方ならぬ御骨折を頂きました。会誌に発表賜わりました原稿は前後九篇ございますが、明治四十三年に御発表の「我が国に伝はれる波斯文に就いて」と云う論文は鎌倉時代に我国に伝えられ解読不可能のまま南蕃文字として古寺の経蔵に束ねられておりましたものを、鮮やかに解読されたのでありまして、一篇の発表が世界の西域史研究に与えた影響は測り知れないものがあつたと承つております。今日史林が巻を重ねますこと三十八、号数も一五〇を数え、史学・地理学・考古学の綜合研究雑誌として学界に独自の地位を保ち、日本ばかりではなく広く世界の学界に多数の読者を持つておりますのも、こうした博士の業績を始めとして、多数の先覚者の御努力の贈物と深く感謝している

次第であります。

本会は昨年十一月に博士を名誉会員に推戴していささか感謝の意を表明しました。博士が御壮健で学問研究のために愈々御活躍されることをのみ、会員一同祈念しておりましたところ、揺らずも御逝去に遭い驚愕哀痛、措くところを知りません。この上は一同相依つて史学研究会の活動を盛んにし、博士の御遺志に副うように努める決意であることを霊前にお誓いして、弔辞といたします。

昭和三十年四月十七日

史学研究会理事長原随園

羽田博士略歴

明治十五年　五月十五日　誕　生
明治三七年　七月　第三高等学校卒業
明治四十年　七月　東京帝国大学文科大学史学科卒業
同　年　九月　京都帝国大学大学院入学
明治四二年　九月　京都帝国大学文科大学講師ヲ嘱託セラル
明治四五年　四月　学術研究ノ為清国奉天及北京ヘ出張ヲ命ゼラル
大正　二年　四月　京都帝国大学文科大学助教授ニ任ゼラル
大正　三年　六月　露国ヘ出張仰付ケラル
大正　八年　七月　言語学及ウラルアルタイ語学研究ノ為米国英国仏国ヘ留学ヲ命ゼラル
同　年十二月　丁抹国ヲ留学国ニ追加セラル
大正十一年五月　文学博士ノ学位ヲ授ケラル
大正十三年四月　京都帝国大学教授ニ任ゼラレ文学部勤務ヲ命ゼラル
大正十五年九月　東洋史学第三講座担任ヲ命ゼラル
昭和三年七月　支那ヘ出張ヲ命ゼラル
昭和四年四月　東方文化学院京都研究所商議員ヲ委嘱セラル
同　年同月　「中央亜細亜の探険とその意義」ニツキテ御進講
昭和五年六月　露西亜及満洲ヘ出張ヲ命ゼラル
昭和七年十月　京都帝国大学文学部長ニ補セラル
昭和九年七月　京都帝国大学満蒙調査会理事ヲ委嘱セラル
同　年十月　京都帝国大学文学部長ヲ免ゼラル
昭和十年六月　満洲国出張ヲ命ゼラル
昭和十一年一月　新年御講書始ニ御進講「金史世宗本紀大定十三年四月ノ条」
同　年五月　京都帝国大学満蒙調査会委員ヲ委嘱セラル
同　年七月　帝国学士院会員仰付ラル
同　年十月　京都帝国大学附属図書館長ニ補セラル
昭和十三年四月　東方文化研究所商議員兼理事ヲ委嘱セラル

同　年　七月　満洲国及中華民国ヘ出張ヲ命ゼラル
同　年十一月　帝室博物館顧問仰付ケラル
同　年　同月　京都帝国大学総長ニ任ゼラル
同　年十二月　教学局参与仰付ケラル
同　年　同月　教育審議会委員仰付ケラル
昭和十四年　八月　中華民国ヘ出張ヲ命ゼラル
昭和十五年　四月　中華民国ヘ出張ヲ命ゼラル
同　年　五月　科学振興調査会委員仰付ケラル
昭和十八年　八月　民族研究所参与仰付ケラル
同　年十二月　学術研究会議会員仰付ケラル
昭和十九年十二月　国史編纂調査会委員仰付ケラル
昭和二十年　二月　東方文化研究所長ヲ委嘱セラル
同　年十一月　願ニ依リ京都帝国大学総長ヲ免ゼラル
同　年十二月　貴族院議員ニ任ゼラル
昭和二一年　三月　京都大学名誉教授ノ名称ヲ授ケラル
昭和二二年　四月　東方学会会長ヲ委嘱セラル
同　年　八月　中日文化協会評議員ヲ委嘱セラル
昭和二三年　三月　国立博物館評議会評議員ヲ命ゼラル
同　年　同月　東方文化研究所ノ京都大学人文科学研究所ヘノ合併ニヨリ所長ヲ退職ス
昭和二四年　十月　法隆寺国宝保存委員会顧問ヲ委嘱セラル
昭和二七年　七月　フランス翰林院ヨリジュリアン賞ヲ授与サル
昭和二八年十一月　文化勲賞ヲ授ケラル
同　年　同月　文化功労者トシテ文化功労年金ヲ受ケラル
昭和二九年十一月　京都市ヨリ名誉市民ノ称号ヲ贈ラル
昭和三十年　一月　フランス政府ヨリレジョン・ド・ノール勲章ヲ贈ラル
同　年四月十三日　逝　去
同　年　同月　従二位ニ叙セラレ、木盃ヲ下賜サル

羽田博士著作目録

著　書

書　名	発行所	発行年月
元朝駅伝雑考	東洋文庫	昭和五年九月
西域文明史概論	弘文堂	昭和六年四月
東洋史教授資料	富山房	昭和七年十一月
満和辞典	京都帝国大学満蒙調査会	昭和十二年十二月
西域文化史	座右宝刊行会	昭和二三年六月

編修・監修・企劃書

大唐西域記・同考異索引（京都帝国大学文科大学叢書第一）…京都帝国大学文科大学…明治四四年十月

敦煌遺書第一集（影印版・活字版）（P・ペリオ氏と共編）…東亜攷究会…大正十五年十二月
一神論巻三、合綴序聡迷詩所経…京都研究所…昭和六年十月
大唐大慈恩寺三蔵法師伝、附録同考異索引…東方文化学院京都研究所…昭和七年十一月
明代満蒙史料　明実録抄蒙古篇…日満文化協会…昭和十八年十二月
開国百年記念明治文化史論集……乾元社…昭和二七年十一月
明治文化史全十四巻（既刊九冊）…洋洋社…昭和二八年十二月以降
日米文化交渉史全六巻（既刊一冊）…洋洋社…昭和二九年三月以降
飛鳥奈良時代の文化……武田薬品工業株式会社…昭和三十年五月

主要論文

題目	掲載雑誌（書）発行年月
蒙古の宗教的風俗習慣……	東洋哲学一四…明治四十年八、十月ノ七・九
蒙古族の宗教的風俗……	禅宗一七〇…明治四二年一月
蒙古駅伝考……	東洋協会学術報告第一冊…明治四二年十二月
我国に伝はれる波斯文に就いて…	史学研究会講演集三…明治四三年七月
漢訳の仏典に就て……	芸文二ノ四…明治四四年四月
大谷伯爵所蔵新疆史料解説……	東洋学報一ノ二…明治四四年五月
窣都語の回鶻碑文……	芸文三ノ一…明治四五年一月
新出波斯残経に就て……	東洋学報二ノ二…明治四五年五月
帖木児と永楽帝……	芸文三ノ一〇…大正元年十月
唐故三十姓可汗貴女阿那氏之墓誌…	東洋学報三ノ一〇…大正二年一月
回鶻文の天地八陽神呪経……	芸文四ノ二…大正二年二月
五体清文鑑……	芸文四ノ八…大正二年八月
波斯国酋長阿羅憾丘銘……	東洋学報三ノ三…大正二年十月
回鶻文の仏典に就きて……	史学雑誌二五ノ六…大正三年六月
站……	経済大辞書六…大正三年七月
回鶻文の天地八陽神呪経……	東洋学報五ノ一・二…大正四年二月
回鶻文法華経普門品断片……	東洋学報五ノ三…大正四年九月
附回鶻文の天地八陽神呪経補	
遼金時代の乱軍に就いて……	芸文六ノ九…大正四年九月
「再び遼金時代の乱軍に就いて」を読む	史学雑誌二七ノ一…大正五年一月
西遼建国の始末及び其年紀……	史林一ノ二…大正五年四月
回鶻文女子売渡文書……	東洋学報六ノ二…大正五年五月
北方民族の間に於ける巫に就いて	芸文七ノ一二…大正五年十二月
亀茲・于闐の研究……	史林二ノ三…大正六年七月
華夷訳語の編者馬沙亦黒……	東洋学報七ノ三…大正六年九月
元朝秘史に見ゆる蒙古の文化……	芸文八ノ一二…大正六年十二月
敦煌発見の景教経典一神論（解説）	芸文九ノ一…大正七年一月
九姓回鶻と Toquz Oguz との関係を論ず、同補遺	東洋学報九ノ一…大正八年一月
ル・コック氏著摩尼教遺文巻三…	芸文一四ノ一…大正十二年一月
釈迦牟尼如来像法滅尽之記（解説）	史林八ノ一…大正十二年一月
漢国の地と康国人……	支那学三ノ五…大正十二年二月

漢蕃対音千字文の断簡……東洋学報一三ノ三…大正十二年　八月
トルコ族の間に於ける仏教……宗教研究五ノ一八…大正十二年　八月
天と祇と祁連と……史林九ノ一…大正十三年　一月
契丹文字の新資料……史林一〇ノ一…大正十四年　一月
敦煌の千仏洞に就いて……仏教美術四…大正十四年　九月
回鶻訳本安慧の俱舎論実義疏…白鳥博士還暦記念東洋史論叢…大正十四年十二月
景教経典序聴迷詩所経に就いて…内藤博士還暦祝賀支那学論叢…大正十五年　五月
敦煌千仏洞の営造に就いて……歴史と地理二〇ノ二…昭和　二年　二月
元朝の漢文明に対する態度……狩野博士還暦記念支那学論叢…昭和　三年　二月
支那北族諸朝と漢文明……支那一九ノ一〇…昭和　三年　十月
景教経典志玄安楽経に就いて……東洋学報一八ノ一…昭和　四年　八月
元朝の海青牌……考古学論叢二…昭和　五年　六月
大月氏及び貴霜に就いて……史学雑誌四一ノ九…昭和　五年　九月
唐光啓元年書写沙州、伊州地志残巻に就いて…小川博士還暦記念史学地理学論叢…昭和　五年　十月
吐魯番出土回鶻文摩尼教徒祈願文の残簡…桑原博士還暦記念東洋史論叢…昭和　五年十二月
舞楽の渾脱といふ名称につきて…市村博士古稀記念東洋史論叢…昭和　八年　八月
成吉思皇帝聖旨牌……歴史と地理三四ノ四・五…昭和　九年十一月
宋元時代総説……世界文化史大系宋元時代…昭和　十年　九月
中央亜細亜の文化……岩波講座東洋思潮第十四回…昭和　十年十二月
清文鑑和解、満語墓編解説……東洋史研究一ノ六…昭和十一年　八月
「興胡」名義考……池内博士還暦記念東洋史論叢…昭和十五年　三月
慧超往五天竺伝逐録……紀元二千六百年記念史学論文集…昭和十六年　四月
漢民族の同化力説について……東洋学報二九ノ三・四（白鳥博士記念論文集）…昭和十九年　一月
大秦景教大聖通真帰法碑及び大秦景教宣元至本経残巻について東方学一…昭和二六年　三月
樹下人物図について——博物館…museum…昭和二六年　五月
新収品
トルコ文華厳経断簡……関西大学東西学術研究所論叢第六（石浜先生還暦記念論文五）…昭和二八年　九月
飛鳥奈良時代の文化（綜説）……飛鳥奈良時代の文化…昭和三十年　五月

欧文著作

A propos d'un texte fragmentaire de prière manichéenne en ouigour provenant de Tourfan.
Memoirs of the Research Department of The Toyo Bunko (Oriental Library) No. 6. Tokyo, the Toyo Bunko, 1932.

A propos des Ta Yue-tche et des Kouei-chouang.
Bulletin de la Maison Franco-Japonaise, Tome IV, Nos 1–4. Tokyo, La Maison Franco Japonaise, 1933.

Une Tablette du Décret Sacré de L'empereur Genghis.
Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko (Oriental Library) No. 8. Tokyo, The Toyo Bunko, 1936.